

3周年を迎えたモディ政権を読み解く

2017年5月26日インドはモディ政権スタートから丸3年を経過した。

経済政策について全体的に俯瞰するとマクロ経済の安定が実現したことに対する評価が高い。前政権から引き継いだ時点におけるインドのマクロ経済情勢は、コントロールできないインフレ、混乱状態の財政、ルピーの下落、汚職で身動き取れない行政など危機と言ってもいい状況にあり、インドに対する内外の信認が地に落ちていた時期である。これらの問題を克服してマクロ経済の安定性を取り戻したことは大きい。言うまでもないことだがこの状態までにした陰にはラグラム・ラジャン前 RBI 総裁の、デリーから何と言われてもぶれない確固とした金融政策運営があったからだ。そしてその金融政策においては政策決定を金融政策委員会の合議制により行う仕組みを取り入れたことはインドでの歴史的な改革である。またラジャン前総裁も強く望んでいて、インドの経済活動システムの近代化を大きく前進させ国際標準に近づけたという意味で「破産倒産法施行」の意義も大きい。今更近代化でもないが19世紀イギリス統治時代からの法律制度が残っているインドとしては画期的な出来事である。こうした取り組みは無論ラジャン総裁という稀有な能力を持った RBI 総裁の力と言えるが、モディ首相の理解と支持がない限り実現は難しかった。これらの取り組みはまさしくモディ改革の一部である。そしてまた大きな改革での出来事は何といても統一物品サービス税（以下、GST）を7月1日にロールアウトしたことである。

当初4月スタートという目標で進んでいたが GST 法案の上院での可決成立が4月6日となり遅れた。しかしその後の準備作業には多くの州政府も一致団結し急ピッチで共通の目標に挑んだ。これもまた今までのインド観を払拭させるような印象を受ける。GST で中央政府と州政府とのフェデラリズム思考の融合（コンセンサス）といったものがモディ首相の強いリーダーシップのもとで出来上がっているからだ。これは前政権と全く異なるモディ政権の特徴と言える。その GST はスタートして10日を経過するが今のところ大きなトラブルはなく、州を越えての貨物輸送はチェックポストがなくなったために輸送時間が大幅に短縮されたとの報道もある。インドの経済活動の風景を一変させることになるだろう。

モディ首相は、自らの考えを国家的事業として実行させる時には公的企業のネットワークの活用を重視する傾向がある。特に一人一口座運動では国営銀行ネットワークを活用したし、記憶の新しいところでは流通高額紙幣の廃止で国営銀行のネットワークをフル稼働させた。このような効果的な国営企業の活用もモディ政権の特徴とするところだろう。

メディア各紙はモディ政権の3年を経過したことでその3年を振り返る特集記事を組んでおり、各紙とも経済政策での成功と改革政策の進展へポジティブな評価を報じている。そして一部メディアでは、市民や経済界トップに対するアンケートを行いその結果を報じている。例えば5月26日付 Times of India 紙は、不特定多数に対しモディ政権誕生時の2014年との比

較において現在のモディ政権についてのアンケートを行い、318.5万人から回答を得た結果を報道している。興味深いので一部を紹介したい。

最初に「モディ政権のパフォーマンス全体」について、48%が大変良い、28%が良い、13%が平均的、11%が貧弱と答えている。モディ政権を積極的評価するものは、大変良いと良いで計76%にも達している。

「生活がどんなに変わったか」との問いに対しては、21%が大変良くなった、37%がやや良くなった、29%が変わらず、悪くなったと答えたのは僅か13%にとどまる。

「モディ政権がとった決定で重要と思うものは何か」との問いに対しては、48%が高額紙幣廃止、28%が GST、17%が国民清掃運動、11%がパキスタンへの限定攻撃、7%が一人一口座運動で、アンケート時点ではまだ GST がスタートしていないこともあり、昨年11月の高額紙幣への支持が圧倒的である。

「3年間でモディ首相の人気はどうか」との問いに対しては、61%が人気増大、12%が不変、下がったと答えたのは12%と少数派であった。

そして興味深い問いであるが、「もし今日下院議員選挙が行われたら現在の与党インド人民党 (BJP) への支持の状況はどうか」との問いに対して、61%が前回総選挙年2014年よりも良くなる、23%が2014年と同じ、2014年より悪くなると答えたのは16%にとどまる。BJP に対する国民に期待は依然として高いというか前与党の国民会議派 (以下、コングレス) への支持は大失速している。

同じ日の Business Standard 紙もインド企業の CEO 30名に対してモディ首相の経済運営についてアンケートを取った結果を報じている。

先ず GST について、「GST は経済成長を刺激するか」との問いでは97%が Yes と答えている。

次に「この3年間で雇用を増やすことが出来たか」との問いには63%が Yes と回答している。「タックステロリズムはどうか」との問いには73%がないと答え、「政府は財政赤字目標をマネージできると思うか」との問いに対しては93%が Yes と答えている。結果は言うまでもなくモディの経済政策を支持するとの内容である。

CEO 達からのコメントとしては労働改革、不安定な労使関係と紛争の多発を減らす対策の必要性が挙げられた。もう一つ挙げられたのは依然として、特に製造業に残る許認可事項の煩雑さ解消のための改革の必要性である。モディ政権は Ease of doing Business では相当に力を入れてやってきているがまだ不十分であることを物語っている。

民間経済調査機関 CRISIL のモディ政権3年レビュー報告によれば、モディ政権3年で今後更なる取り組みが求められかつ難易度が高いものとして「雇用の創出と労働法の簡素化」「銀行セクターの改革」「単一農業市場の創出」「健康と初等教育」などを挙げている。これらは制度改革も必要としており一朝一夕に結果は出せないが今後2年で特に注力しなければならないテーマであることは間違いない。

モディ政権は、政策モットーとして「最小の政府で最大の統治を」掲げている。

かつて BJP は、中産階級を支持母体とした党派であるが故に中産階級の利益を重視すると考えられてきたが、モディ政権は違った。モディ首相はむしろ「プロ貧困者」主義である。

モディ首相は、毎月一回各省の次官クラスとビデオ会議を開催するという。このモディ首相自ら行う官僚に対する人心掌握力にはいつも感心させられるのだが、そのとき彼が常に言うことは「貧しい人々のことを片時も忘れるな」ということらしい。確かにモディ首相は政権一年目前 कांग्रेस 政権がとった「農村地区雇用保障スキーム」や「食糧保証スキーム」に対して疑いの念を持っていたが、いまはそれをもっと効率性を高め、恩恵を国民に直接届く形に改良して継続している。しかし補助金は予算に掲げた範囲であり、原資を前政権のように決して隠されたポケットから出すというようなことはない。彼のモットーとしている「最小の政府で最大の統治を」は、単純に政府の仕事を減らしていくという意味では決してない。モディは中央政府が州政府や国営企業と効率的に協働していくことで全国民へ政策の恩典を行き届かせることを実現しようとしているのである。モディ政権スタート時に着手した一人一口座運動と前政権からの引継いだもののいち早くスタートさせた個人生体識別番号制 **Aadhaar** 制度はこの典型である。行政の利益を国民に行き渡らせるためのツールのインフラであり「最小の政府で最大の統治を」を実現させるためには欠かせないプロジェクトであったわけである。

モディ政権が丸三年目を迎えた 5 月 26 日にムケルジー大統領はモディ首相に賛辞を贈った。

モディ首相は「**Mann Ki Baat (=My Thoughts)**」と題するラジオ番組を持っており毎月一回ラジオを通じて広く国民に自分の考えを述べている。この「**Mann Ki Baat**」でのモディ首相の講話を編集した本が出版されることとなり、そのお披露目式で大統領は次のように述べた。「あらゆるリーダーにとって人々に感銘を与えるようなコミュニケーションは重要なことだ。そのような能力なしでは、リーダーは自分の持っている理想や行動に対し人々を鼓舞し同感させることが出来ないだろう。私はモディ首相が人々に最も感銘を与えられるコミュニケーションターだと疑いもなくそう思う。インド独立以来ではネルーが世俗主義と憲法の価値を人々に（感銘を与えるコミュニケーションをもって）伝えた。インディラ・ガンジーはバングラデッシュ解放戦争で（感銘を与えるコミュニケーションをもって）国民を動員した。モディ首相によって取られた数々のイニシアティブは（モディ首相は感銘を与えるコミュニケーションをもって）インドの経済をしっかりと前に進ませた。」（5 月 26 日付大統領秘書発表のステートメントより）

元来 कांग्रेस 出身であるムケルジー大統領のこの異例ともいえる賛辞にはどんな言葉よりもモディ首相への評価が集約されているように思える。

これまでのモディ政権 3 年間の結果を見ると、我々は **BJP** と **BJP** の創設母体となった民族義勇団 (**RSS**) との関係に由来する従来の **BJP** への固定観念を変えなければならないかもしれない。モディ首相 3 年間の活動と政策成果は、人々に対して世俗政党としての **BJP** という安心感を与えたと思われるからだ。モディの存在に依拠するところが大きくヒンズーナショナリズムの色彩強い **BJP** の本質は変わっていないのだという見方も依然として残るが、筆者は政権責任政党として政策の実施プロセスを牽引してきたここ 3 年で、モディ率いる **BJP** はインドの経済改革に重きを置く普遍的世俗政党に一步進んだように思う。あるメディアは、「先達のヴァジペーイーが 2004 年選挙で富裕層優先政策に偏ったがゆえに政権を失ったことを踏まえ、モディはよりプラグマチックなアプローチをとっている。彼は中道右派寄りの綱領 (**Platform**) を作り上げ温情的な保守主義を取っている。」とこう評している。**BJP** の変化を

分かりやすく端的にまとめたコメントだと思う。(5月26日 Times of India 紙)

次回総選挙まで残り2年を切った。モディ政権が3年間の改革実績を維持してなお安定的に新インドをリードしていくことが出来るのか。選挙に勝つためにモディ政権は新たな改革には着手しなくなるとか、よりヒンズー教を意識した政策を取るのではないかといった慎重な見方が海外から発せられているが、インド内ではモディ政権は世俗政治に徹し、改革政策への取り組み姿勢は不変という見方が強い。グローバル的には政治経済共に不安定要素が多い中において、インドの経済成長を実現していこうモディ首相のリーダーシップにはますます目が離せなくなっている。

(執筆日：2017年7月14日)

—了—

本レポートは情報提供のみを目的として作成したものであり、何らの行動を勧誘するものではありません。
ご利用に関しては、すべてお客さまご自身でご判断くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。
本レポートは信頼できると思われる情報に基づいて作成していますが、当行はその正確性を保証するものではありません。
本レポートのご利用によりお客さまがいかなる損失、損害を受けられても当行は一切の責任を負いません。
本レポートはお客さま限りでご利用くださいますようお願いいたします。